

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

さわっておどろく：能動的につかむ世界のイメージ：
インタビュー (特集 社会に自分を合わせなくていい)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広瀬, 浩二郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4814

さわっておどろく——能動的につかむ世界のイメージ

聞き手・まとめ 冠野 文

一二月初めの新聞で、みんぱく（国立民族学博物館）の広瀬浩二朗さんが書いた「五感の展示 さわる感動」の記事を読む。千里生まれの私にとって、みんぱくは子ども頃からよく行った馴染みの場所。もともと展示物の多くに「さわれる」博物館だったが、視覚だけではない他の感覚、とりわけ触覚を楽しもうという話に興味津々。「We」読者であり、NPO法人「弱視の子どもたちに絵本を」で活動する田中加津代さんが、広瀬さんとの間をつないでくださって、みんぱくの研究室を訪ねた。

（二〇一〇年二月一七日）

—インタビュー—
広瀬 浩二朗さん（国立民族学博物館准教授）

さわって学んだ盲学校時代

広瀬 小学校時代は弱視で視力が0・05くらいあったので、地域の学校に行ってたんです。五、六年生でだいぶ視力が下がって、点字をやらないといけないねって小学校の先生にも言われてたんですけど、一般の小学校

で一人だけ周りと違う、ぶつぶつが出ている真っ白な紙を使うのはすごく抵抗があつて、最初は母親にマジックで大きく字を書いてもらったりしてたのが、最後はそれも見えなくなりました。

今だったら、全盲の人が地域の学校に通うのは当たり前前とは言わないまでも、都会では増えてるし、文科省も

統合教育を認めますけど、僕が中学に進学した一九八〇年代前半は、全盲で点字を使って勉強するなら盲学校に行きなさいというのが常識でした。僕も周りの同級生と同じ中学に行きたい気持ちは強かったけど、やはり無理だと自分でも納得してたし、点字を勉強しないといかないと思っただので、盲学校に進学しました。

「さわる展示」をやっていくときも、いろんな物事を考えるときも、今の自分の根っこは盲学校の六年間にあるなあと感じます。中高は「さわって学ぶ」を身につけた時代で、いちばん大きかったのは点字で勉強すること。教科書は全部点字で、学期初めにどさつと配られる。それを読まないと思うし、嫌々触読していた。だんだん指で読めるようになると、これは便利だと思ってしまう。点字で本を読み、点字で試験を受けて、どつぶり点字につかった勉強をしてました。今振り返ると、盲学校に行つてよかったなあと思いますけど、在学中は、目の見えない人だけが集まっている環境は不自然だから、いつかはここから出ていかないといけない、出ていきたいとずつと考えてましたよね。

——盲学校のよかったところは？

広瀬 地域の学校に行くっていう統合教育の議論のときに、五教科の教科書が確保できるかとか、どうしてもそっちにいくんだけど、実はもっと重要で見落とされがちなのは体育や美術の授業です。地域の学校に通って、大学にも進学した視覚障害者と話をすると、体育は何をしてた？って訊いたら、みんなと一緒に球技などはできないから見学になったり、いい学校だと先生が特別に一人ついて、マンツーマンで走ったりしてたとか。美術で写生のときは、何もせず、あれはつまらない授業だったとか。現在の学校のシステムだと、多数派の中に障害児が一人だけぼつんと入って、そのケアをしろというのはなかなか難しいし、やむを得ないかなあと思いますけど。

盲学校の場合は視覚障害者の特性に応じて、さわるだけじゃなく、残った感覚を使っているんなことをするんです。中高のときの体育の授業は、安全を確保するという名目で一五人くらいの生徒に先生が三人もつくから、みっちりチェックされて全然さばれないし、イヤでしたけどね(笑)。四月は陸上競技、短距離だったら音の鳴るゴールに向かって全力で走る。夏はボールがあつて、秋はマット運動。球技ではフロアバレーボールって、ネ



ひろせ・こうじろう

1967年、東京生まれ。弱視の子ども時代を送る。13歳で全盲になり、中学校から盲学校へ進学。京都大学、同大学院を経て、2001年より国立民族学博物館に勤務。専門は日本宗教史、障害者文化論。主な著書に『さわる文化への招待』（世界思想社）、『触る門には福来たる』（岩波書店）などがある。その他、編著書として『万人のための点字力入門』（生活書院）、『だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム』（読書工房）も刊行している。

ツトの下を転がす六人制バレーをしたり、冬はスキー教室があったり。当時はめんどくさいし、厳しいなあって不満たらたらでしたけど、さまざまなことをさせてもらって今はよかったです。

さわって感じる迫力

広瀬 美術は造形が多くて、粘土で陶芸をしたり、木の卵を鑿のでつくったり、触覚を駆使して貼り絵や版画

もやりました。美術の先生は彫刻が専門で、僕はこの人にすごく影響を受けてます。その先生の持論が「彫刻作品はさわって鑑賞すべきものだ」で、そもそも彫刻家は手を使ってつくってるんだから、手でさわって鑑賞するのが当たり前じゃないかと。美術の準備室には先生がつくった裸婦像がたくさんあって、僕は美術が好きだったし、よく遊びに行っていました。ちょうど中学生って異性に興味をもち始める頃だから、（わりーっ）と思いながら、でも周りの目も若干気になるし（笑）、さりげなく裸婦像にさわっていた。そしたら先生が「そんなさわり方ではダメだ。もつと彫刻のエネルギを全身で感じないといけない」っておっしゃるんですね。

まず像そのもののエネルギ。ロダンの作品なんかエネルギの集合体だと思うけど、地から天に勢いよく伸びていく力がある。つくるにあたって彫刻家は自分のエネルギを像に込めている。その二つのエネルギを感じるためには、鑑賞者も下から上に、手だけじゃなく全身で抱きつくようなダイナミックなさわり方をしない、エネルギの交流が大事だと。だから先生の裸婦像にも思いっきり抱きついてさわるようにしました。わ

「……と全身でさわると、何かしら見てるのは違う感動というか、迫力があるなあと、その後もいろんな作品にさわる中で実感しています。」

——盲学校の先生は目が見える方が多いんですか？

広瀬 基本は見える人ですね。盲学校には、高等部の普通科三年が終わった後に専攻科があつて、その鍼灸あるまの課程だと視覚障害の先生がいますが、普通科は晴眼の先生が大半です。ほとんどの盲学校は都道府県立ですから、公立の教員採用試験を通った人が来る。視覚障害を持つ先生も最近だいたい増えてますけど、点字で採用試験を実施するところが少ないのが現状です。

——目が見える人がほとんどでしたら、点字を知らない先生も多いってことですか？

広瀬 僕が行った筑波大附属盲学校は、国立では一校だけの盲学校で、ほかの国立の附属学校と同じように独自採用なのでベテランの人が多かったし、新任の先生も筑波大なんかでいわゆる特殊教育を勉強してきた人がほとんどで、さすがに点字を知らない先生はいなかったかな。ちょっと怪しい人は何人かいましたけど。ただ、地方の盲学校では、視覚障害関係の勉強を何もせずに着任

して、点字を知らないまま転任していく先生もいる。それは今でも由々しき問題だと言われています。

少数派としてカルチャーショック

広瀬 中高は主に触覚を使って学ぶことをじっくり身につけた時代で、その学びの一つの到達点、集大成として大学受験がありました。予備校のテキストをボランティアさんに点訳してもらい、第一志望の大学に合格しました。点字受験では試験時間が通常の1.5倍になって、理科なんかで写真を見る問題が代替問題になったりありますけど、試験内容は基本的にほかの受験生と同じ。それを受けて合格できたっていうのは、一〇代の僕にとっては大きな自信になりましたね。一九八一年の国際障害者年で「完全参加と平等」が言われてましたけど、点字で一般の入試を突破して大学に入ったことは、完全参加と平等を自分なりに具体化できたという感じで、僕にとっては大きな出来事でした。

——大学進学は盲学校ではわりと普通のことだったんですか？

広瀬 当時、視覚障害者の世界では大学に進学したいから筑波大附属盲学校へ行けと言われてて、それは全国から生徒が集まって切磋琢磨することもあるし、盲教育に熱意を持つてる先生がたくさんいる学校だということもあつたと思います。そんな環境で、僕はあまり迷いもなく、ずっと大学進学を漠然とながら考えてました。

高校に入った当初は、九割方が大学進学希望なんです。でも、二年生、三年生と進む中で自分の進路について真剣に悩む：おそらく一般の高校生よりも盲学校の生徒は、多少深刻に考えるわけです。まず、大学を卒業しても仕事がない。国家公務員試験が点字で受けられるようになったのは平成に入ってからですし、各自治体の公務員試験、教員採用試験も、点字受験できないところのほうが多めに多い。企業で働くのも非常に難しいわけだ、たとえば自分一人でこつこつコンピューターのプログラムをつくるといった仕事では能力を発揮できても、目の見えてる同僚と一緒に何かをやって、ノルマや期限があつてとなると、厳しいところがある。企業に入っても、結局は人間関係でトラブルって数年で辞めてしまうケースが結構多いですね。

東洋医学ブームもあつて、僕らの世代では晴眼で鍼灸の分野に就職する人が増えて、「専攻科に行つて理療の免許を取れば食いつぶれがない」という時代は終わったと言われてたんです。それでも鍼灸の免許を持つてれば可能性は広がるし、なんだかんだ言つても一〇〇％に近い就職率はあつたんで、大学の後に盲学校へ戻つてきても鍼灸の勉強をする人も多かつた。

よく盲学校は「温室」だと言われます。同じ障害を持つ仲間がいて、理解ある先生に囲まれて、居心地はいいし、自由もある。でも、いずれはそこを出なきゃいけない不安、温室の外に対する恐れみたいなものもあるわけだ、将来のことをあれこれ考えていつて、僕と同級生では、大学へ行つた人と理療科へ行つた人と、最終的にほぼ半々でした。地方の盲学校だと、理療科に行く割合がもっと高くなります。

六年通つた盲学校から大学へ入つてみると、一学年二五〇〇人以上の中で目が見えないのは自分だけ。僕は京都大学が受け入れた最初の視覚障害学生で、入学した直後に新聞やテレビに取り上げられたこともあつて、白い杖を持つてキャンパスを歩いていると目立つわけです。

自分では完全参加と平等だ、目が見えてる人と同じだぞ
と思ってるのに、晴眼者は視覚障害者のことを何も知ら
ないってことに愕然としました。カルチャーショックの
連続です。授業で点字でメモをとってたら、これで字が
書けるんだ、すごいねー。移動で階段をとことこ昇って
いたら、一人で歩けるんだ、すごいねー。昼休みに学食
に行ったら、ご飯をきれいに食べられるんだねー。挙
げ句の果てに、トイレは一人で大丈夫？って（笑）。

最初の数ヶ月は、こんな過小評価にすごく苛立ちを感
じて。ただ冷静に考えてみると、今まで出会ったことがな
いんだから知らないのは当たり前だよなって、少数派な
んだから自己主張しないと分かってもらえないことに遅
ればせながら気づいたんですね。大学の環境に慣れて授
業をさばり始めると同時に、少しずつ友だちも増えて、
大学時代は本当に楽しい時代でした。

さわるおもしろさ、楽しさに目覚める

広瀬 勉強の面で大きな恩恵だったのはパソコンで
す。高校時代はコンピューターで字を書くといっても、

キーボードでがしゃがしゃ入力して画面に字を出し、そ
れを晴眼者に見てもらって、「その字は違います」「じ
ゃ、これですか？」って、のんびりやってみましたね。そ
れが高校二年生の夏休みが終わって学校へ行ったら、パ
ソコンがしゃべった。当時はボイスシンセサイザー、で
かい音声合成装置をパソコンにつないで、キーボードで
「A」と打ったら、一秒くらいして「エー」とパソコン
が言ってくれる。今のシステムに比べるとずいぶんしょ
ぼい性能ですけど、とにかく入力して音を聞いて、自力
で墨字（すみじ）／触覚で認識する点字に対し視覚で認識する
文字）が書けるようになったのは、まさに革命的なこと
でした。

大学では、教養部の予算でパソコンと点字ワープロの
システムを買ってもらって、少しずつ練習して自分でレ
ポートなどを書くようになりました。当時はワープロで
誤字のない卒業論文を書き上げるっていうのが目標で、
それもどうにか無事に提出できた。パソコンで晴眼者と
同じ字が扱えるようになったのは、間違いなくありがた
いことなんですけど、やっぱり大学で受ける授業は目が
見えてる人中心で、僕の勉強の方法も、盲学校時代の「さ

わって学ぶ」スタイルから離れて、なるべく晴眼者と同じような形でやっていこうと考えてました。

壁にぶつかるところは三年生になって日本史の専門課程にあがったときです。大学に進学するとき、どうせ全盲者は何をやるにしても厳しいんだから、あまり深く「将来は…」とか悩まずに、開き直って自分の好きなことを選択しなさいと、盲学校の先生に言われてました。僕は子どものときから歴史小説が好きだったんで、あまり深く考えずに（笑）日本史学科を選んだんです。でも専門の授業が始まって、あらためて全盲には歴史研究が難しいなあと痛感したんですね。最大のハードルは古文書の解読で、自分では読めないし、周りのボランティアに頼もうとしても無理。文字通り八方ふさがりで、遅ればせながらこれはチョイスを間違ったかなと思いました。

でも、自分が好きで選んだ学科ですから、どうにかしないといけない。いろいろ試行錯誤する中で、聞き取り調査する方法に方向転換しました。いまだに文献が自由に読めないのはハンディキャップなんですけど、全国各地へ行って我流で聞き取り調査、フィールドワークをする中で「さわって楽しむ」ことに目覚めていくわけで

す。フィールドワークで博物館や郷土資料館、お寺や神社を訪ねたときに、ほんとはダメだけど、まあ内緒であなただけだつたらいいでしょうって、貴重な仏像をさわらせてもらったり、いろんな土器にさわったり、そこで素直に「さわる」っておもしろいなあと再認識したんですね。

誰もが楽しめるミュージアムを考える

——就職されたのが、さわることでできる博物館だったというのは、広瀬さん自身の「さわる楽しさを伝えたい」思いと、相乗効果みたいなのところはありますか？

広瀬 そうですね、「さわる楽しさを目の見えない人に伝えていく」っていうのは、僕の活動の一つの原点になってます。もちろん博物館で自分の研究を続けていくのもライフワークですけど、それと同時に自分が味わってきた「さわる楽しさ」「さわる喜び」を多くの人に伝えることができるポジションに就職したんだと自覚しました。

みんなは展示の企画も自由で、やりたい人がプロジ

エクトチームをつくって、予算をとってやっていきます。ありがたいことに、入って二年目の二〇〇二年から一年間、若手の在外研究制度でアメリカのプリンストン大学に行けたんです。ニューヨークに近かったので、電話やメールで問い合わせ、いろんな博物館を訪問しました。それぞれの博物館の視覚障害者サービスは僕が思っていた以上に充実してて、「さわって楽しむ」を経験できたのはよかったです。

アメリカから帰って、オリジナルの展覧会を企画しようという準備をして、二〇〇六年に初めて「さわる文字、さわる世界」展をやったんですね。やっぱり視覚障害者に来てほしい、それとさわって楽しむ世界を多くの人に伝えたい思いがありました。「見る」ことが中心だったこれまでの博物館からすれば、目が見えない人が来るのは想定外で、たくさんさんの視覚障害者の来館は博物館にもインパクトを与えることができる、より開かれたミュージアムを創っていく……というようなことを考えてたんです。アメリカでの経験もいかして、「視覚障害者が楽しめる」ってどういうことだ？と考えると、音声の解説も大切だけど、さわる体験が一番だろう、なるべくさわって

楽しめるモノをあれこれ集めようと思っただんですね。

母校の筑波大附属盲学校や京都府立盲学校が明治時代の貴重な資料を保管していて、その「知られざるお宝」に光を当てたいという思いもありました。ただ、それらのお宝って、ぱっと見、地味だよなあと。さわる展覧会で見た目を気にするのもおかしいんですけど(笑)、やるからにはちよっと派手にアピールして、いろんな人に来てもらおうと。だから、単純にさわって楽しいモノ、バードカービングとか神社の模型、仏像なんかも集めました。そこからだんだんと、「視覚障害者だけでなく、みんながさわって楽しめる展覧会にしよう」という方針にシフトしていくんです。

——博物館の展示で、「さわれる」「さわることでもできる」っていう、見ることの補いみたいな位置づけと、広瀬さんのおっしゃる「さわる楽しさ」とか「五感の展示」は発想が違いますよね。

広瀬 目が見える人は視覚に頼った生活をしてるから、意外と「さわる」ことをしていない。そういう人たちに触覚の奥深さを伝えていくのは大事なんじゃないかと。それと、さわることを得意とする視覚障害者から何

かしら積極的な発信ができるんじゃないかと、僕の中の障害観も変わっていきました。「さわる文字、さわる世界」展は、誰もが楽しめるという意味の「ユニバーサル」を考え始めるきっかけだったと思います。

自分も持っている「さわる感覚」に気づく

広瀬 「さわって学ぶ」「さわって楽しむ」の次にくるのが、「さわって愕おどろく」。ユニバーサルってことを考えた始めた頃、「さわって愕く」感動に気づきました。さわることは視覚障害者だけのものじゃないし、目の見えない人が特殊な魔法の指先を持って、点字をすらすら読んでもるわけでもない。赤ん坊は何でもさわって口に入れてようとしますが、大きくなる間に「さわっちゃいけません、なめちゃいけません」とか言われて視覚中心の生活になって、本来持ってたはずの触覚の能力を忘れていく。たまたま僕の場合は、触覚を使わない期間が一三年と比較的短かったんで、わりとすぐにさわる力が目覚めて、点字を読めるようになった。でも、これが中年で急に失明したら、三〇年も四〇年も深い眠りに入っている

触覚は起きてくれない。だから大人になって糖尿病などで失明された方は、なかなか点字が読めない。

—— そうなったら私も、音？って思いますがもんね。

広瀬 そこで、いろんなものにさわって、自分は触覚の存在を忘れてたと気づくのが「愕く」。べつに特別なことじゃなくて、自分の中に眠っていた潜在能力を再発見するということですね。もう一つ、「さわって愕く」には博物館の展示を通じて視覚障害者のイメージを変えていきたいという僕の希望が込められています。どうしても視覚障害はマイナスの観点、否定形でとらえられる。もちろん「歩くことができない」とか「文字の読み書きができない」とか不自由もあるわけですけど、時には肯定形で定義してもいいかなと思います。

一字違いで、「視覚を使えない」ではなく「視覚を使わない」と考えると、視覚の代わりに聴覚や触覚の感覚を使うんだってプラス思考になりますよね。「○○がでない」と思っていた視覚障害者は、実は晴眼者がさわっても分からない点字をさりと読んでいる。触覚を使うという面では、自分よりも潜在能力を開拓した人なんだと気づく。目が見えない人、ひいては障害に対する意

識が逆転するのも、僕は「愕く」の中に含めてるんです。点字が触読できるし、暗闇でも動ける。とっかかりとしては「スゴイ！」でいいんです。でも、それが「あの人は特別なんだ」という方向にいかずに、人間の感覚は多様で、同じような力は自分たちの中にもあることに気づくのが「愕く」で、そこが大事だと思います。

繰り返し、懸命にさわる

——「さわって愕く」展示をしてきて、来館者からフールドバックがいろいろあると思うんですけど、広瀬さん自身が想定外だったことは何かありますか？

広瀬 「さわる文字、さわる世界」展のときに、いくつか「さわる絵」を展示しました。輪郭を盛り上げたり、タッチの違いを手触りの異なる点で表現するなど、実験的につくったもので、聖徳太子の画像とか、ゴッホの郵便配達夫を大判の触図にしました。美術館でも彫刻や立体作品はさわる、絵画はさわれないから言葉で鑑賞するっていうのが視覚障害者対応のオーソドックスな方法ですけど、言葉による解説だけじゃなくて、どうにかして

「さわる絵」をつくりたい。といっても触覚絵画のマニユアルはないし、輪郭の盛り上げ方や素材については、作品によってケースバイケースで考えないといけない。

聖徳太子や郵便配達夫の絵をさわって、どれぐらい分かるの？と訊かれると、僕自身も非常に心許ないです。でも言葉だけで説明されるよりも、不十分でもさわって自分で確認できるのは能動的な楽しさがあると思います。

言葉の解説を受けながら、視覚障害者が「さわる絵」をじっくり鑑賞するのが理想ですけど、個人差もあるし、なかなか難しいもんなんですね、それ（笑）。

——（「さわる絵」のサンプルをさわらせていただく）サイズも難しいですね。原画そのものは大きくても、手の大きさとかさわれる範囲の限度がありますもんね。

広瀬 正直なところ僕も「さわる絵」の効果については半信半疑で、現状ではこれはちよつと分かんないよな——って（笑）。実験的につくったものだし、こういう取り組みも近年行なわれてますよって紹介の意味で出したんです。実際、初めてゴッホの絵にさわることができてよかったという意見がある反面、まったく分からないという視覚障害者からの批判の声もありました。

ある日、この企画展に晴眼の知人が来て、目をつぶってゴッホの絵にさわってくれました。そしたら全然分かんなかったと。その人はわりとしつこくて（笑）、一通り企画展をぐる——と見て、締めくくりにもう一回さわってみただけ、やっぱり分かんない。まあいいやと思って他の展示場を見て、ご飯も食べて、帰る前にもう一度さわったそうです。結局あまり分かんなかったけど、最初にさわったときと、二番目、三番目にさわったときでは印象が違っていて、なんとなく最後は絵の雰囲気が出たような気がしたと感想を書いてくれました。これだけしつこく時間をかけて何回もさわってことは、一般の来館者はなかなかしませんけど、「さわる」ことにごだわる晴眼者がいたことに勇気づけられたし、「さわって愕く」展覧会の可能性を実感しました。

この企画展のときに、「さわる五原則かきくけこ」をつくって、あちこちに貼ってたんです。「軽くさわる」「気をつけてさわる」「繰り返しさわる」「懸命にさわると」「壊さないでさわる」の五つ。「軽く」「気をつけて」「壊さないで」は、資料を大切に扱ってほしいということなんですけど、さわるときに大事なものは「繰り返し

し」と「懸命に」だと僕は思ってた。ぱっと見たら分かることでも、さわって理解するためには時間がかかる。大量の情報を瞬時に得るという点では、視覚は触覚よりも優れてるのは間違いない。たしかに触覚は量とスピードで劣ってるけど、視覚のように受動的にぱっと入ってくるんじゃないくて、自分の手を動かして情報を増やしていく。点だった情報を面、そして立体へと広げていく。あたかもパズルを組み合わせていくようなおもしろさがあるし、逆に難しさもある。

「懸命にさわる」は、指先や手のひらに集中し、しっかりと、じっくりさわってほしいという心構え、「繰り返しさわる」は、頭を使い時間をかけてさわる「しつこさ」を奨励してるわけです。さっきの晴眼の知人は、まさに「繰り返し」 「懸命に」を実践してくれたわけで、「なんとなく分かったような気がする」は、いささか頼りないコメントですけど、一回目と二回目、三回目は違ってたっていうのは、ああそうなんだよなーって。

自分の経験もふまえて言うと、繰り返し懸命にさわったものって、ぱっと見て分かったような気になるのとは違って、より身体的というか、記憶に刻み込まれると思

うんですね。今の世の中の「質より量」とか早いことがいいことだみたいな発想とは違って、時間をかけることの大切さ、ゆっくり味わうことのおもしろさを教えてくれるのが「さわる」展示。さわる企画展では、従来の展覧会とは時間の流れが違うんだというところも感じてもらえたらと思ってます。

視覚を使わない解放感を伝えたい

—— 広瀬さんが次はこんなことをやってみたい！という企画はありますか？

広瀬 二〇〇九年度から「ユニバーサル・ミュージアム研究会」を組織していて、できれば二〇一二年に成果発表の展覧会をやりたいと思ってます。僕は展覧会るときは、目が見える・見えないに関係なく楽しめる触覚系のワークショップをたくさんやるんです。子ども向けのワークショップは、大阪のキッズプラザで小学生向け「暗闇探検」イベントをこれまで四回やっていて、今度は保育園でワークショップをやってみないかとお誘いを受けてます。幼児が相手ということは理屈が通用しませんか

ら、触覚を介した真剣勝負です。僕にとって新たなチャレンジで、うまくいくかどうか分かんないし（笑）、失敗する可能性もあるわけですけど、さわる世界の豊かさ、視覚を使わない解放感を子どもにも伝えることができたら、真のユニバーサルに近づくなあと。今まで自分の意識の中では、目の見えない人と見える人が双方向な感じになるのがユニバーサルだったんです。見えない人は不自由で手助けを受けるばかりの存在じゃなくて、見える人とはちよつと違う経験や生活スタイルをもっている、そのことを伝えたいと。そこから一歩進んで、子どもも念頭に置いたワークショップや展覧会ができればいいなあと考えてます。

◆ 広瀬さんが関わる展覧会と講演会

「仮面の世界へご招待―さわって学ぶ和歌祭―」…開催中〜2月27日（日）@和歌山県立博物館ロビー（無料）、9時30分〜17時、月休。2月27日にはロビーにて広瀬さんの講演「『創・使・伝・活』で拓くユニバーサル・ミュージアムの未来」開催。13時30分〜15時、無料。